

米澤泉著

## 『「女子」の誕生』

(勁草書房、2014年 232頁)

石崎裕子



本書は女性向けファッション誌を分析の俎上におき、従来とは異なる意味合いで、近年メディア上で使われている「女子」の誕生を辿りながら、女性の生き方や意識の変化を浮き彫りにしたものである。女子大生向けファッション雑誌の人気凋落と宝島社の女性雑誌の隆盛を読み解きながら、ファッション誌において「女子」が生み出されていくプロセスが解き明かされていく。

1970年代の大学の大衆化と女性の進学率の上昇を背景に、女子大生をターゲットに生まれた『JJ』（光文社、1975年創刊）は、ファッションと女性のライフスタイルを直結させた。1980年代に入ると「女子大生ブーム」を追い風に、『CanCam』（小学館、1982年創刊）など、ライバル誌の創刊が相次いだ。創刊当初、表紙のタイトルが赤文字だったことからこれらの雑誌は赤文字雑誌と総称されるようになる。誰でもお嬢様に見えるファッションの提案によって、「幸せな結婚」をつかむ指南書としての役割を赤文字雑誌は担った。とりわけ、光文社は、1990年代以降、元『JJ』読者の30代専業主婦を対象に『VERY』（1995年創刊）を、さらに40代となった『VERY』の読者に向けて『STORY』（2002年創刊）を創刊し、女子大生からOL、結婚による退職を経て専業主婦へとという女性のライフコースの王道をファッション誌によって体現した。

女子大生にはキャンパスで男子学生の目を惹く格好を、OLには会社で上司や同僚に好感を持たれる服を、専業主婦にはママとして、妻として幸せそうに見える服をとった具合に、赤文字雑誌では、女性の年齢や立場によってふさわしいファッションが細分化されている。それゆえにファッション誌における「女子」の誕生は、2000年代以降の赤文字雑誌の人気低迷と女性のライフコースの変化を抜きには語れない。部数が落ち込んでいく『JJ』や『CanCam』と入れ替わるかのように、世代や立場を超えて女性たちの大きな支持を得ていくのが、青文字雑誌と呼ばれる『Sweet』（1999年創刊）をはじめとする宝島社のファッション雑誌である。

1999年、創刊号において『Sweet』が掲げた「28歳、一生“女の子”宣言！」こそ、ファッション誌における「女子」誕生の瞬間である。本来であれば、女の子や女子と呼ばれる年齢をとくに過ぎている女性たちに、可愛いものをいくつになってもあきらめずに身にまとうことが奨励されている。若い女性がタイトスカートやハイヒールに象徴される大人の女性を感じさせるファッションに憧れるという図式はもはや崩壊し、最高のほめ言葉は「大人かわいい」である。未婚も既婚も問わず、専業主婦でも派遣社員でもバリバリ

と働くキャリア志向でもかまわない、リボンやフリルのような少女らしいモチーフを使ったおしゃれが大好きならば、どのような女性でも歓迎するのが『Sweet』である。『Sweet』の成功後、30代向けに『InRed』（宝島社、2003年創刊）、そして「不惑でも女子」は可能かという問いに挑むかのように、40代となった『InRed』の読者対象に『GLOW』（宝島社、2010年創刊）が生まれる。ファッション誌における「女子」の誕生と成長は、宝島社のこれらの青文字雑誌と共にあったといっても過言ではない。いとも軽やかに年齢も立場も飛び越えた「三〇代女子」や「四〇代女子」の姿は、ファッション誌においておなじみの存在となっていく。

筋金入りのファッション誌の「女子」を自認する著者によれば、21世紀を生きる女性が求めるものは、赤文字雑誌が提示してきた「お嬢様」や「奥様」ではなく、結婚しても、ママになっても「女子」や「ガール」でありたいという欲望に応えてくれる雑誌である。外見上のファッションにとどまらず、妻や母役割にとられることなく、「私」を優先する生き方こそ「女子」なのである。特に、『GLOW』では、好きな服を着て、好きなように生きたい、いくつになっても「私自身が輝きたい」という自己肯定感が、誌面に貫かれている。シングル、離婚経験者、シングルマザーも含めた多様なライフスタイルが「大人女子」や「四〇代女子」として肯定されている。「女子」という点においてどのような女性も対等であり、ここには勝ち組も負け組もない。青文字雑誌の世界とは、異性の視線を気にすることなく自由気ままにふるまえる「卒業のない女子校」（185頁）なのである。

しかし、ひとたび「女子」をめぐる社会の現状に目を向ければ、女性の活躍が謳われる一方で、女性の非正規雇用比率はいまや過半数を超えている。M字カーブの底は年々浅くなり、働く女性は増えているが、女性全体の雇用の質はむしろ悪化傾向にある。非正規雇用の仕事で生計を立てなければならない単身女性やパートをかけたしながら子育てをするシングルマザーなど女性間の格差も深刻である。派遣やアルバイトといった不安定な働き方がもたらす年金収入の少なさは、高齢女性の貧困リスクの高まりにもつながる。女性の正規雇用での再就職の厳しさをふまれば、女性の貧困は決して他人事などではなく、誰にでも起こりうる切実な問題である。

どのような女性であっても、ひとりひとりが自分らしく生きるためには、例えば、たとえ100歳になってもおしゃれを楽しみながら輝き続けるためには、ジェンダーの視点から私たちはどのような社会を目指していかなければならないのかということ改めて考えさせられた。ファッションが大好きな「女子」への著者の思いと期待が込められた一冊である。

(いしざき ゆうこ 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科  
准教授)